荒井治子　歌集

・荒井治子さん
・昭和七年横浜生れ
・つくば市宝陽台在住

荒井治子　歌集

透明列車

・秋の日の透明な午後帰りきて「ただいま・・・」をいう自らの声

・問うてみるきっかけ探し梨をむくことば螺旋にさがりゆくまで

・歯車に合わせることはもういいと本を読みつぐひとのありたり

・秋風に幟りはためく新そばのすすればのびる生命線は

・ガラス張りのアフタヌーンティーという茶房女ばかりの笑いがきこゆ

・タージリン茶葉のひらくを見つめおり琥珀の色の透けゆきて　秋

・それぞれの虫を飼いいてポケットに鳴かせておりぬさびしき今は

・許せざるひとつのことば秋の日に果肉を裂きてマユミは咲けり

・栗おこわ「秋がきたよ」と言いながらかまどに屈みいし母を憶いき

・木の葉型の皿の山水秋のきてさんま　匹柑橘の酸

・つくば嶺の見ゆるホームに立ちおれば　瞬にすぐ透明列車

荒井治子　歌集

実むらさき

・複製のブリキの汽車を手のひらにしみじみ遠き兄の口笛

・もの思う人にあるらし海を見る公園の椅子に影の久しき

・あかときの淡き眠りの網の目をひぐらしの声がほどきゆくなり

・蛍火ほどの火をもちて粥をたく部屋ぬち通る新米の香は

・朝食にフルーツ入りのヨーグルト掬いておりぬ　芙蓉の咲きて

・「赤トンボ」メゾソプラノにきこえきぬ風いでて今ゆるる白萩

・夕映えにいま父母を思うなり遠景の畑にひと屈む夕

・ゆりの花あたまの雄しべ葬ればかの十月のずぶぬれの貌

・母の齢こえてしまいぬ実むらさき瑠璃の冴ゆるを窓に見ている

・オクターヴ高き電話は夜の九時月下美人が咲いたと言うて

・坂東太郎渡れば風の変わるなり頬をすぎゆくゆきあいの風

・木遺歌きこえてくるか「きやり」にてそばすすりおり正月七日

・「冬景色」ラジオにきく夜鉛筆を削りてみたし肥後守もて

荒井治子　歌集

春愁一

わが前を歩めるひとの衿元にレモンイエローのスカーフが舞う

野の径にむらさきを解き蕗の薹そっとふれてる春のとば口

招ばれてるそんな心地に木場の町歩けばひとのことばやさしき

深川に浅蜊しぐれ煮買いてのち大横川の風にふかるる

春愁にわたしの海馬が漂えば芽吹きの風を吸わせてやらむ

行き合いの風わたる街さわさわと水木の花の白きが揺るる

「何をして暮らしているの」と友が問う薔薇咲き盛る山下公園

きのうより今日三月の水の音アンダンテにて歩幅さだまる

ふきのとう水に放てばさ緑のみずみずとせるこの瞬間がすき

滾つ湯に競いて口を開けてゆく江戸前のあさりと呟きながら

おのずから林あかるくなるあした無表情なるわが冬帽子

竹林に入らば人語は遠くなり鴉ふとぶと鳴きてゆきたり

荒井治子　歌集

春愁二

・秋の日の透明な午後帰りきて「ただいま・・・」をいう自らの声

・問うてみるきっかけ探し梨をむくことば螺旋にさがりゆくまで

・歯車に合わせることはもういいと本を読みつぐひとのありたり

・秋風に幟りはためく新そばのすすればのびる生命線は

・ガラス張りのアフタヌーンティーという茶房女ばかりの笑いがきこゆ

・タージリン茶葉のひらくを見つめおり琥珀の色の透けゆきて　秋

・それぞれの虫を飼いいてポケットに鳴かせておりぬさびしき今は

・許せざるひとつのことば秋の日に果肉を裂きてマユミは咲けり

・栗おこわ「秋がきたよ」と言いながらかまどに屈みいし母を憶いき

・木の葉型の皿の山水秋のきてさんま　匹柑橘の酸

・つくば嶺の見ゆるホームに立ちおれば　瞬にすぐ透明列車